

山口 元樹

『インドネシアのイスラーム改革主義運動
——アラブ人コミュニティの教育活動と
社会統合』

慶應義塾大学出版会、2018年

土佐林 慶太

早稲田大学大学院文学研究科中東・イスラーム研究コース博士後期課程



20世紀初頭から中葉のインドネシア¹社会は、いくつかの転換点を迎える。1901年にオランダ植民地政庁は、住民の福祉向上や権力分散などを骨子とする倫理政策を採用するが、1920年代末になると共産党蜂起などが起因となり弾圧政策に転じる。1942年3月にはオランダ植民地期が終了し、同時に約3年半に及ぶ日本軍政期が開始する。1945年8月17日にインドネシア共和国は独立を宣言するが、再植民地化を図ったオランダとの独立戦争は1949年まで続き、同年末にインドネシアは国民国家としてようやく正式な独立を達成する。

本書は、インドネシアのアラブ人によって1914年に結成された宗教・教育団体イルシャードを主要な考察対象に、ハドラミー（アラビア半島南部の現イエメン共和国・ハドラマウト地方の出身者とその子孫）を含むアラブ人コミュニティと変容するインドネシア社会の関係を論じたものである。分析には、インドネシア語（ムラユ語）、オランダ語、アラビア語による史料を利用して、20世紀インドネシアの宗教民族史研究に新たな光を投げかける。なお本書は、著者が2015年3月に慶應義塾大学大学院文学研究科に提出した博士学位論文「インドネシア国家形成期におけるアラブ人団体イルシャードの変容—イスラーム改革主義・教育・国民統合」に、その後の研究成果を反映させて加筆・修正を加えたものである。

全6章の本論及び序章と終章から構成される本書の章立てと概略は、以下の通りである。序章「問題の所在—インドネシアのイスラーム改革主

義運動とアラブ人の社会統合」では、議論の前提となる情報について整理がなされる。まず、アラブ人によるインドネシアへの移住の歴史や、中東・アラブ地域におけるイスラーム改革主義運動の成立とインドネシアへのその影響について説明が行われる。次に、ハドラミー移民およびイルシャードという2つの方向から先行研究を整理し、20世紀初頭から中葉のアラブ人コミュニティについてイルシャードの活動を中心に論じる中で、2つの検討課題を設定する。すなわち、①「イルシャードの『ハドラミー』や『アラブ人』という性質を相対化しながら、『イスラーム改革主義』の性質を明らかにすること」、②「イルシャードの活動の分析から、アラブ人コミュニティがホスト社会に統合されていく過程とその要因を検証すること」(21頁)である。最後に、史料改題と章構成が示される。

第1章「イスラーム改革主義運動の源流」では、イルシャードの設立者・指導者であるスーダン出身のアフマド・スールカティーのインドネシア以前の経歴と活動に焦点を当て、彼の思想形成の背景とインドネシアに赴くことになった経緯を論じる。著者は、従来の研究で見過ごされてきた19世紀マッカでの教育改革運動とスールカティーの関連に着目する。当時マッカでは、サウラティーヤ学院をはじめとする民間の教育機関（近代的マドラサ）による教育改革運動が起こり、その影響力は同地の教育活動の中心であるハラーム・モスクにまで及んでいた。スールカティーがマッカ滞在中に師事した人物には、こうした運動の関係者

が多くおり、彼の改革主義思想の背景には、エジプトの改革主義者の著作だけではなく、マッカでの教育改革運動による影響もあることを指摘する。またインドネシアからの巡礼者増加に伴い、当時のマッカはインドネシア・ムスリムにとって学術活動の中心地であり、インドネシアとマッカの間には学問ネットワークが形成されていた。このネットワークを背景に、マッカで活動していたスールカティーはインドネシアへ赴くことになったと述べる。

第2章「イスラーム改革主義運動の始まり」では、インドネシアにおけるアラブ人コミュニティの「覚醒(ナフダ)」の動きと広域的なイスラーム改革主義運動との関係が検討され、イルシャードの設立過程とその当時の団体の特性、そこでのスールカティーの位置づけが考察される。まず、同地のアラブ人「覚醒」の要因について、インドネシア社会内の側面(オランダ植民地政庁の規制によるアラブ人経済活動の停滞)と、インドネシア社会外の側面(中東アラブ地域のイスラーム改革主義運動、オスマン帝国の奨学金制度、海外から招聘されたアラブ人教師)から論じられる。こうした「覚醒」の結果、アラブ人たちは、ジャマイヤト・ハイルをはじめとするマドラサ・タイプの学校開設など、インドネシアにおけるイスラーム改革主義運動の中で先駆的な活躍をした。一方で、アラブ人の「覚醒」は、アラウィー・イルシャーディー論争を引き起こし、アラブ人コミュニティの分裂を招いた。著者は、「シャリーファ(アラウィーの娘)に対する婚姻規制」と「サイイド・シャリーフの手に口づけをする習慣」の2点から論争を考察し、アラウィーの特権を改革主義思想から批判したスールカティーは、支持者とともにイルシャードを結成したと述べる。また、イルシャードの「協会」執行部や法学派の問題を論じる中で、スールカティーの掲げる改革主義思想とそれを背景とする「平等主義」が、イルシャード内部で必ずしも受け入れられたわけではないことを指摘する。

第3章「インドネシア・ナショナリズムの形成」では、プリブミによるインドネシア・ナショナリズムが形成された20世紀初頭から1920年代後半

までを対象に、教育とイスラーム運動という観点から、アラブ人コミュニティとイルシャードの活動が考察される。教育活動について、オランダ植民地政庁による公教育制度の拡充により、アラブ人の教育活動が政庁のそれと分離していたというモビニ・ケシェーの研究に対して疑問を呈す。著者は、フォルクスラート(植民地議会)での議論や生徒数の統計データを提示し、当初公教育に対して否定的な態度をとっていたアラブ人も、1920年代にはその必要性を認識し、エリート初等教育に対する高い関心があったことを論じる。またイルシャードにおいても、スールカティーの主導により公教育制度への対応と中東での教育機関構想が試みられており、これらはベネディクト・アンダーソンが唱える「巡礼」から分離していたわけではないことが論じられる。次に、イスラーム運動について、既存の研究では1910年代にナショナリズム運動及びイスラーム運動を主導したイスラーム同盟がプリブミ的性格を強めていく中で、アラブ人は「外来者」としてそれらの運動から周辺化されていくと述べられてきた。しかし著者は、1922年から断続的に開催された東インド・イスラーム会議を検討する中で、アラブ人たちは中東アラブ地域との間のネットワークや経済力を活かして、引き続き高い存在感を示していたと論じる。また同会議において、ムハマディヤとイスラーム同盟の関係が悪化する1920年代後半には、イスラーム同盟とアラブ人の間に再接近の動きが見られることに着目し、アラブ人コミュニティとプリブミによるイスラーム運動の関係が継続していたことを指摘する。

第4章「アラウィー・イルシャーディー論争の収束」では、1930年代前半に行われた中東アラブ地域の改革主義者たちによる論争の仲裁を取り上げ、イスラーム改革主義運動の文脈から、この論争の収束過程を再検討する。まず、エジプトの東洋連盟の仲介による和平交渉を前史として考察し、1930年代の議論の争点が、前時代(第2章)と異なり、「サイイドというラカブ(尊称)の適用」と「アラウィーたちの預言者ムハンマドの子孫としての系譜の妥当性」の2点に変化していたことを指摘する。次に、東洋連盟の活動停止後

に行われた中東アラブ地域のイスラーム改革主義者による仲裁の試みとして、ラシード・リダーとシャキーブ・アルスラーンによる仲裁内容とその後の展開が考察される。両者の仲裁内容は、イルシャーディー側にとって不利な判断であったが、イルシャーードの設立過程を考慮すれば、それを正面から批判することもできず、イルシャーードは困難な状況に立たされていたと論じる。またこれらの仲裁の試みは、論争を完全に解決するものとは言えないが、論争を沈静化させる上で一役を担ったものとして評価する。さらに、こうした論争の沈静化によって、プラナカンのアラブ人による党派を超えた統一団体として、インドネシア・アラブ協会の結成が可能になったのではないかと指摘する。

第5章「ハドラマウトかインドネシアか」では、1920年代末からオランダ植民地期の終わりまでを対象に、アラブ人コミュニティの帰属意識と教育活動が検討される。プリブミの間でインドネシア人という意識が明確になる1920年代末以降、アラブ人コミュニティの間では「ハドラマウトかインドネシアか」という帰属意識を巡る問題が主要な対立軸となる。イルシャーディーを含むハドラマミーたちの間では、ハドラマウトに進出して後進的な状況を改革しようとする「ハドラマウト志向」が高揚する一方、現地生まれのプラナカンのアラブ人の中では、インドネシア・ナショナリズムを掲げるインドネシア・アラブ協会が勢力を獲得し、帰属意識の分裂が顕著になると指摘する。次に、教育活動について、エジプトへの留学生の派遣と植民地の公教育制度の活用という二方向から検討し、アラブ人コミュニティの分裂が教育活動にも見られることを論じる。但し、イルシャーード内でも両方向の教育活動が行われていたことが示され、帰属意識を巡る問題はある程度の流動性を持つことが述べられる。最後に、当該期間のスールカティーの言説が取り上げられる。教育に関しては以前(第3章)と大きく変化し、インドネシア内に限定することが論じられる。また世俗主義の影響に対する危機感からプリブミのムスリムとの協力関係強化が示唆され、オランダ植民地期末期までには「現地志向」がイルシャーード内で

多数派を占めると論じる。しかし、アラブ人性の保持という観点から見れば、イルシャーードとインドネシア・アラブ協会の「現地志向」に差異が認められと付記される。

第6章「独立後のインドネシア社会への統合」では、日本軍政期と独立革命期に起因するアラブ人コミュニティの社会的状況の変化を概説し、1950年代以降のイルシャーードの活動を検討する。まず、日本軍政がアラブ人コミュニティに及ぼした影響として、前時代の公教育制度の破壊とハドラマウトとの関係断絶という点から検討される。その結果、アラブ人たちは、自身のコミュニティにおける教育活動の方針を再考する必要に迫られた。また、ハドラマウトとの関係断絶により、独立後ほとんどのアラブ人がインドネシア国籍を選択し、彼らはホスト社会に適応せざるを得なくなった。こうして1950年代以降、イルシャーードの活動は2つの点で大きな変容を遂げたと著者は主張する。ひとつ目は、イスラーム政党であるマシュミ党と協力関係を構築する中で、「アラブ人」や「ハドラマミー」という性質ではなく、インドネシアのイスラーム組織という点を強調したことである。ふたつ目は、その教育活動において、アラブ人の中心と見做されてきたアラビア語教育の重視を止め、インドネシア語を教授用語とする一般学校系統を中心に据えたことである。こうした「現地志向」によって、ホスト社会に適応しようとするイルシャーードの姿勢は、オランダ植民地期からの継続であり、1950年代に概ね完成したと論じる。

終章「インドネシアにおける統合の原理としてのイスラーム」では、本書の結論について以下3点から述べられる。まず、イルシャーードの結成及びその後の変容には、スールカティーの「平等主義」を強調する「イスラーム改革主義」の性質が大きな役割を果たしたこと、次に、イルシャーードの「イスラーム改革主義」の性質が、アラブ人コミュニティがホスト社会に統合されていく過程で重要な要因となったこと、最後に、アラブ人のアイデンティティの構造とインドネシア社会統合の原理におけるイスラームの意義である。

以上が本書の概要である。本書の意義について

て、まず全体を通して言える点は、インドネシア語（ムラユ語）、オランダ語、アラビア語と多言語に渡る一次史料の分析により、インドネシアのアラブ人コミュニティを現地社会、オランダ植民地政庁、中東・アラブ地域のイスラーム世界といった複合的な視点から論じた点にある。特に、「イスラーム改革主義思想」というキーワードで、インドネシアのアラブ人コミュニティを「インドネシア」という一国史の枠組みから脱却し、広域的な「イスラーム世界」の中に位置づけた点は、高く評価される。また著者の使用した史料は、単に多言語というにとどまらず、その史料自体にも独創性が見られる。当該期間のインドネシア史研究でこれまで多く用いられてきた旧宗主国文書や同時代の人物による回想録に加え、従来網羅的に利用されることが少なかった定期刊行物や希少性の高い冊子類、さらには著者自身による聞き取り調査も駆使し、スールカティーの「平等主義」的な「イスラーム改革主義思想」や、彼の影響を受けたイルシャードの活動とその変容について、実証的かつより詳細に描き出している。こうした分析を通して、当該期間のインドネシアにおけるイスラーム運動の一端を明らかにしたという点でも意義があり、この点は著者の長年にわたる各国での文献調査の成果と言える。

個別のテーマに関する意義としては、インドネシア・ナショナリズム史に対する寄与が挙げられる。多くのインドネシア・ナショナリズム研究では、イスラーム同盟の運動が後退する1920年代以降、宗教を旗印としない世俗的な運動や植民地制度に注目し、インドネシア・ナショナリズムや国民国家インドネシアの形成を論じる。こうした研究では、インドネシア社会の統合原理として、ひとつの「インドネシア民族」ということが強調される一方で、プリブミではないアラブ人や華人などの外来東洋人の問題は十分に検討されていない。本書では、第3章で論じたイルシャードとイスラーム同盟の関係や、第6章で論じたイルシャードとマシュミ党の関係など、インドネシア・ナショナリズム運動の文脈で、アラブ人コミュニティの運動とプリブミの運動の連関が明らかにされている。また、アラブ人コミュニティと

ホスト社会インドネシアの関係を歴史的に分析する中で、インドネシア社会の統合原理のひとつとしての「イスラーム」の可能性を論じた点は特筆すべきである。

さらに、多くの章を横断して考察された教育活動の分析も、貴重な研究成果である。20世紀初頭以降のインドネシア史において、本稿冒頭で言及した倫理政策に基づく公教育制度の整備と拡大は、インドネシア・ナショナリズム運動とも切り離せない重要な検討課題である。本書では、アラブ人やその団体による私教育を論じるだけでなく、オランダ植民地期からインドネシア共和国形成期にかけて展開された公教育との関係も含めて、その継続と断絶を論じ、通史的な公私に渡る教育活動を明らかにしている。これらはインドネシア教育史への大な貢献と言える。

最後に、疑問点をいくつか指摘したい。まず細かな点として、イルシャードの「協会」の位置付け、本部と支部の関係、団体の資金源など組織構成については不明瞭な点が見られる。またスールカティーの思想については詳述される一方で、彼の思想的影響を受けた他のイルシャードの指導者や、彼と対立する「協会」側の指導者については、あまり具体的に論じられていない。その結果、イルシャードの設立過程や教育活動におけるスールカティーの役割は理解できるが、「協会」も含めたイルシャード全体でのスールカティーの位置づけや他のイルシャード指導者との関係性、さらにはスールカティー死後のイルシャードの運営については曖昧さが残る。

また内容について、「オランダ植民地期末期までには『現地志向』がイルシャード内で多数派となり、その延長線上で、イルシャードのホスト社会への統合は進み、1950年代に概ね完成する」という第5章から第6章にまたがる議論は、以下の点からもう少し慎重さを要すると感じる。第一に、本書でも述べられた1937年に設立されるイスラーム諸団体の連合体ミアイや1941年に創設されるインドネシア人民協議会において、イルシャードは重要な地位を占めていた。それにも関わらず、これらの中で大きな争点となったインドネシアの国家原則に関する議論において、イル

シャーダは常に明確な態度を示していない。また、同じアラブ系のインドネシア・アラブ協会は、こうしたイルシャーダの態度を日本軍政期直前まで批判し続けており、オランダ植民地期末期には「現地志向」がイルシャーダ内で多数派になるという主張には些か疑問が残る。第二に、日本軍政期と独立革命期におけるイルシャーダの「現地志向」については、具体的に何も議論されていない。確かに当該期間は、その前後の時代と比較して、史料が圧倒的に少なく、分析が非常に困難であるという研究状況は理解できる。しかしアラブ人指導者の中でも、独立後を見据えて活動する者がいたのではないだろうか。そして、1950年代以前のアラブ人指導者による独立後の構想を明らか

かにすることで、1950年代以降のアラブ人のホスト社会への「統合」過程におけるより主体的な「関与」を示すことができるのではないだろうか、というのが三点目である。しかし、これら自体が一冊の本となるような大きなテーマであり、後進の課題であるとも言える。

本書は、近現代インドネシア史を研究する者にとって、もちろん必読の書である。また、中東アラブ地域のイスラーム史や改革主義思想の影響を受けたインドネシア以外の国々のイスラーム思想・運動史を研究する者にとっても、本書で提示されたインドネシアの事例や研究の視角は、それらの国々との比較の道を拓くものと言えるだろう。

註

- 1 1942年まではオランダ領東インド。著者は本書内で、インドネシア史において、インドネシアという国民国家の概念が確立されたと理解されている1920年代末までは「オランダ領東インド」、それ以降は「インドネシア」という表現を用いる(27頁)。但し、本稿では全て「インドネシア」という表記で統一した。